

令和元年12月6日

相馬地方小学校長会

第129号

発行責任者 鈴木 宣雄

編集責任者 遠藤 和宏

発行所 ライト印刷



親父の小言

飯館村教育委員会教育長

遠藤 哲

現職中のこと、二十代の教員が校長室に防寒着を着たまま入って来た。「何かおかしくないか。」と聞いても、きよとんとした表情で全く気づかない。「門に入らば、傘を脱げ」、日本家屋で長年の風土から培われた習慣であり礼儀である。

酒の席で着座のままで片手を挙げて目上の人から飲み物を注がれている。「お前も立て。」と心の中で叫ぶ。昔から「長幼の序」といって、若年者と年長者の間には守るべき決まりがある。

頑固親父の小言のようではあるが、こういった「不易」の部分が失われつつあることを嘆いている同世代の方も多はずである。

残念なことに教育現場も例外ではない。

授業においても、昔も今も大切にすべき「不易」の部分が軽んじられていないかどうか、校長としてしっかりと点検して、ご教示をお願いしたい。

教師の立ち位置、板書の仕方、発問や声の大きさ、態度や表情、服装や履き物など数えればきりが無い。

また、新学習指導要領でいうところの「主体的・対話的で深い学び」などの「流行」ばかりに目が行き、教師主導での一斉指導などの「不易」な指導が「古いもの」として軽視されていないだろうか。

楽しく凛とした教室の雰囲気、情報機器だけに頼ることなく黒板とチョーク、実物を効果的に活用した指導。削ぎ落とされ、研ぎ澄まされた発問や指示、小集団学習に頼ることなく教師のコーディネートにより成立する対話的な学習。こういった「不易」な指導こそが「主体的・対話的で深い学び」を成立させるための大前提であることを、しっかりと全体で確認することが肝要である。



改めて今回の 災害から学ぶこと

相馬地方小学校長会副会長

午來 勝 顕

今秋は、台風19号、その2週間後の豪雨と、相馬地方は立て続けに未曾有の災害に見舞われた。本校では学区内を流れる川が氾濫した。本校職員は2度も休日を返上して児童の安否確認、被災状況の把握に奔走した。全校児童の約4割の家が床上・床下浸水の被害を受けたが、子ども達が一人も命を落とすことがなかったことが幸いだった。

本校は2回とも体育館が避難所となり、のべ250名以上の方々が避難して来られた。体育館は停電することではなく、辛うじて水道も使用できた。しかし、下水道があふれ、体育館のトイレはすぐに排水ができなくなった。校舎を開放し、落差の大きい2階のトイレを使用して翌朝を迎えた。さまざまな点において、8年前の東日本大震災時の避難所設営とは異なる対応が求められた。

避難所では数多くの本校の子ども達の姿が見られた。普段は「校長先生。」と元気に声をかけてくれる子ども達だが、会釈をするのが精一杯という様子だった。表情は暗く、不安でたまらない様子が感じ取られた。道路が川のようにになっている中を命からがら家族と手をつないで逃げてきたこと、大切な学用品や身の回りの物を置いて来たこと等が思い浮かんだ。子ども達に「大丈夫だよ」と言ってあげることができない自分が歯がゆかった。

現在、学校は通常の授業を行っている。しかし、家庭に帰っても以前の日常生活に戻れない子ども達がいる。保護者の方々の中には、被災した家屋の片付けや諸手続きで疲労と焦燥感が蓄積し、それが子ども達の精神的な不安定さにつながっていることも考えられる。今後子ども達を丁寧に見取って対応していくことが必要になる。全ての子どもが1日も早く元気な笑顔を取り戻してくれることを願っている。

私の学校経営

心を鍛える

相馬市立山上小学校 小 関 洋

台風 19 号の影響で福島一山上間の国道 115 号線が寸断し、断水になりました。しかし、教育委員会の迅速な対応で、玉野地区の児童はバス等で学校に通え、水も確保することができ、一日だけの休業で学校を再開することができました。この度の災害で、学習を保証することや安全・安心を保証することの重要性を再認識した次第です。

本校の児童は、素直で明るく仕事も一生懸命します。しかし、一方で、挨拶に元気がない、自分一人でもできることも友達と一緒にないとやらない、ゲームをする時間が長くなってしまふ、家庭学習をしないと休みがちになるなど、心の弱さや自己調整力の未熟さを感じます。原因は様々ですが、「強い心の育成」を目標の一つに掲げ、次のような取組をしています。

行事ではスタート前や終了後に目標や感想の一言

発表を入れる。返事や挨拶は元気よくできるようにする。朝のマラソンや家庭学習で続ける力を伸ばす。目標は短いスパンで振り返らせ手立てを再考させる等です。特別なことをするのではなく、これまでの実践の視点を変えての取組です。朝のマラソンは、校庭 20 周で 1 都道府県を進む日本 1 周マラソンを行い、現在 10 名が達成しています。今年は全員が達成できそうな感じですが。心を鍛え、強い心の育成や自己調整力の向上を図っています。



学校紹介

「自分たちの学校を自分たちの手で」

南相馬市立上真野小学校 柿 沼 孝 明

本校の職員室には「楽しむことの 10 か条」というものが掲示されています。例えば「自分で決めることを楽しむべし」、「みんなと一緒に楽しむべし」、「前例がないことを楽しむべし」、「とにかくやってみることを楽しむべし」等々。これらは、県小教研特別活動研究部会の指定校である本校が、大切に指導したいことであり、また教職員自身の在り方としても意識したいと考えていることです。

本年度、学級活動の研究授業では、特定の友達の意見に同調したり、安易に多数決で決定することなく、折り合いを付けて合意形成を図る手順や方法を検証しています。全ての校内研究授業をオープン参加型とし、相馬地方の多くの先生方よりご意見やご助言をいただきました。

また、児童会活動や係活動の活性化を図るために、毎週水曜日の昼に 20 分間の「にこにこタイム」を

設定したり、朝の会と帰りの会に振り返りのための「書く時間」や「フリートーク」の時間を位置づけたりしました。これらの取り組みによって、活動に創意工夫が生まれ、子どもたちも自分たちの手で上真野小学校をよりよくしているという手応えを感じています。何よりも実践することを「楽しむ」子どもたちの姿は、この 1 年間の大きな変容です。

自分たちの学校を自分たちの手で創る子どもたちの姿を来年度の研究公開でぜひご覧ください。



随 想

指導者として . . .

相馬市立大野小学校 武 山 弘

「なぜ振らない！」烈火のごとく監督から浴びせられた野球の試合での一コマです。

あの頃は、特に教えられるわけでもなく、何となく中学校での部活動を過ごしていました。これでは、逆立ちしても勝てる訳がありません。

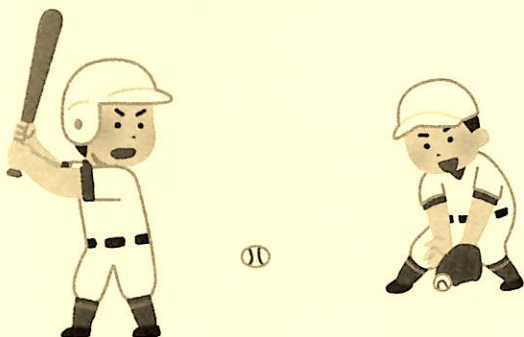
しかし、中学 3 年の春、W 先生が赴任し、野球部の顧問となり私たちは激変しました。キャッチボールはもちろん、バッティングでの足腰の使い方等、野球で必要とされるあらゆる基本技術を叩き込まれました。「目から鱗が落ちる」とはこのようなことを指すのでしょうか。特に覚えているのは、インコースに来たボールを肘をたたみギリギリまで引き付けて逆方向におっつける「秘打・流し打ち」です。

打って、守って、投げて走る。野球の醍醐味を全身で体感していました。負けはしましたが、わずか 3 か月の間に私たちは、地区の決勝戦まで上り詰めたのです。(ちなみに、2 年後輩たちは、県大会優勝、東北大会でも優勝しました。)

W 先生は、情熱家であり理論家でもありました。納得しないと涙を流し、できるまでとことん付き合うのです。できたときは、自分のことのように「それだよ！ それ！」と、また、泣くのです。

昭和の「根性論」や「忍耐」という言葉は、遠い彼方かも知れませんが、今は「主体的・対話的で深い学び」が求められる時代です。指導の在り方も考え方も様々です。理論だけでもだめでしょうし、情熱だけでもこころもとない感じがします。

指導者としてどうあるべきか、また、何が大事なのかを考え続ける、また、見つめることを忘れないようにしていきたいと思う今日この頃です。



「多数決はいけません」

南相馬市立大甕小学校 林 典行

私の初任校は、いわき市ののどかな田園地帯に立地する、1 学年単学級の小さな小学校である。ここは、県小教研特別活動研究推進校に指定され、県の研究協議会を終えたばかりであった。

私は 4 年生を受け持つことになった。この学級は、1 年生から 3 年生まで研修主任が担任していた。研究協議会に向け、力のある先生方にしっかり鍛えられた子どもたちなので、初任者でも耐えられるのではないかと、当時の校長先生のご配慮が働いたのではないかと、今では容易に推測できる。

さて、受け持つ間もない頃の学級活動（厳密には、当時の学習指導要領に則れば学級会活動）の時間に、忘れられない出来事が起きた。子どもたちは活発に意見交流をするのだが、話がなかなかまとまらない。私は、時間も押してきたので、多数決で結論を出してはどうかとアドバイスした。その時である。司会者が毅然とした口調で反論してきた。「先生、多数決はいけません。多数意見の側は、少数意見の考えもどこかに組み入れるなどして、みんなが納得するまで話し合うのです。」

何とも情けないことであるが、教師の方が話し合いの要諦について子どもに諭される格好となった。このような学級であるから、他教科でも活発な話し合い活動を展開することができた。もちろん自分の力などではなく、既に基本がしっかり身についていた結果である。他人の輝で相撲を取っていたという現実、他校に転勤して痛いほど思い知らされた。

最後に、この学級を 3 年生の時に担任していただいた先生は、現、相馬地方小学校長会長でいらっしゃることを申し添える。



新 会 員 ・ 再 転 入 会 員 の 声



こんな磯部小学校に (私のあこがれ)

相馬市立磯部小学校 齋藤 和彦

・あの日から復興に向けて歩み続けてきた学校

- ・複式学級指導法を追究し続けている共同研究
 - ・地域素材（梨）等の総合学習を通じた地域連携
- 私が着任前に HP 等で得た磯部小学校像でした。
- 想像を絶する激甚状況を乗り越えてきた前校長先生始め職員、地域の学校への期待と希望を感じ
 - 複式授業の学び方を習得し健気に学ぶ 35 人の子ども達のやわらかくかわり合う姿に魅せられ
 - 運動会、茶道教室、梨農園、マラソン大会、餅つき等々、地域の方々の労を惜しまない姿勢に感謝し
- これらに応える私の学校像は、やはり子ども達に「授業が楽しみだから学校が好き」と言われる学校。その授業実現に保護者や地域の方々のご支援が向かう磯部小学校。こんな夢（あこがれ）を抱きつつ半年が経ちました。今後とも相馬地方校長会の諸先輩方のご指導ご助言をよろしくお願いいたします。



生まれ変わる校舎と共に

相馬市立日立木小学校 加藤 裕紀

1 年 4 か月の工期で 5 月に始まった校舎長寿命化改修工事が着々と進み、北校舎の 4 つ普通教室と 3 つの特別教室が使用できるようになりました。子ども達のうれしそうな、そしてほっとしたような表情が印象的でした。改修工事と並行しての教育活動ですが、子ども達は工夫や我慢、発見などの貴重な体験を積み重ねています。それから、間近で自分たちの校舎が新しくなっていく過程を目に焼き付けながら、歴史と伝統が息づく日立木小学校の大きな節目に立ち会っています。

生まれ変わる校舎と共に、子どもの視座に立った、あたたかな学校づくりに努めて参ります。どうか諸先輩方のご指導ご助言の程よろしくお願いいたします。



『種徳の子ども』のために

南相馬市立高平小学校 杉内 律子

高平小学校には、14 年振りの勤務となりました。その頃は教務として多くの子ども達、保護者の方々とも関わり、充実した日々を過ごしたことが懐かしく思い出されます。何よりも、管理職を目指したきっかけがそこにあるのです。その学校に校長として勤務できることに、感慨も一入です。

高平地区は、金沢製鉄遺跡・泉官衙遺跡等、歴史の遺跡が数多くあり、自然環境にも恵まれた地域です。北泉海水浴場も 8 年振りに海開きをしました。二宮尊徳の報徳の教えを受け継いでいる地域でもあり、学校教育でも、『種徳の子ども』の育成を目指しております。

地域の方々や保護者の皆様の、学校に対する熱い思いや願いに応えるためにも、子ども達が生き生きと学ぶことができる学校を目指し、日々奮闘しています。



4校の伝統を引き継いで

南相馬市立小高・福浦・金房・
鳩原小学校 藤巻 国孝

4 小学校が仮設校舎から小高小学校校舎に戻って 3 年目となります。震災当時は 4 校合わせて 700 人を超えていた児童が、現在は 58 名にまで減少しています。しかし、学校のよさは今も変わらず残されています。一つ目は話を真剣に聞く子どもたちのまっすぐな瞳です。授業でも集会でも 58 名全員が話を集中して聴くことができます。二つ目は地域の協力です。区長会・敬老会の皆様をはじめとして地域の方の支援体制が再構築されています。そして三つ目は教育環境のすばらしさです。小高区を中心には幼・小・中・高が全て隣接していて、連携しています。先日は合同での避難訓練を実施しました。

これらよき伝統を引継ぎ、保護者・地域の方の協力を得ながら、教職員一丸となって子どもたちの教育に取り組んでいきたいと考えています。校長会の皆様今後ともご指導よろしくお願いいたします。

編 集 後 記

台風 19 号の脅威は、深い爪痕を残した反面、多くのことを教えてくれた。断水した学校では、子どもたちが安心して生活できるようにと、教職員が知恵を働かせ、汗を流した。そして、子どもたちは不便な生活の中でも、やさしさを持ち寄って明るく笑顔で生活できた。人間の温かさと強さを身にしみて感じた。第 129 号発刊にあたり、玉稿をお寄せいただいた飯館村教育委員会教育長様をはじめ諸先生方に厚く御礼申し上げます。